

あ
り
が
と
う
を
届
け
た
い



かながわ感動介護大賞実行委員会

福祉子どもみらい局福祉部高齢福祉課

〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL.045-210-4846

受賞作品の
ドキュメンタリー動画を
Webで公開しています



神奈川県
「認知症の人と
家族を支えるマーク」



ともに生きる社会
かながわ憲章

KANAGAWA CHARTER for an Inclusive Society

Instagram ID: かながわ憲章【公式】

かながわ憲章 検索



第13回 かながわ感動介護大賞 作品集

かながわ感動介護大賞実行委員会

付 録
第12回
最優秀賞作品
漫画化!!

はじめに

おかげさまで「第13回かながわ感動介護大賞」を迎えることができました。ご応募くださった皆さま、介護を受ける方とご家族、そして支援に携わる皆さまに、心より御礼申し上げます。

本大賞は、日常の支え合いを見つめ直し、介護の価値を社会に伝える場です。

受賞作のみならず、すべての応募作が大切なメッセージです。「介護フェアinかながわ」の表彰式では、受賞者の皆さまにお会いでき光栄でした。

介護は施設や事業所だけでなく、家庭や地域の暮らしの中で続いています。介護職の皆さまはもちろん、家族として介護を担う方々も、日々の判断や工夫を重ね、生活を支えておられます。その歩みに敬意と感謝を申し上げます。

国では処遇改善の推進や科学的介護情報システム(LIFE)等、認知症基本法の施行を背景に、尊厳を守り共生社会をめざす取組が進んでいます。

2040年を見据え、地域包括ケアの深化と連携も求められています。私たちも、支える側が安心して支え続けられる環境づくりと、切れ目のない相談・支援体制の充実に取り組んでまいります。

介護は誰もが当事者となり得る営みです。互いを思いやるまなざしが地域に広がるよう、皆さまと歩みを重ねてまいります。

本作品集には、専門職と家族、地域のつながりが重なり合い、暮らしが前に進む瞬間が詰まっています。

小さな気づきや声かけが、本人の笑顔と家族の希望を生むことを物語は教えてくれます。この一冊が、介護に関わる皆さまの励みとなり、更なる理解と応援の輪が広がり、介護の仕事の魅力が多くの皆様に伝わることを願います。

第13回 かながわ感動介護大賞 実行委員長 小泉隆一郎

社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
 一般社団法人神奈川県高齢者福祉施設協議会
 一般社団法人神奈川県老人保健施設協会
 公益社団法人横浜市福祉事業経営者会
 川崎市老人福祉施設事業協会
 公益社団法人神奈川県社会福祉士会
 公益社団法人神奈川県介護福祉士会
 一般社団法人神奈川県介護支援専門員協会
 神奈川県介護福祉士養成校連絡協議会
 公益社団法人かながわ福祉サービス振興会
 公益財団法人神奈川県老人クラブ連合会
 公立大学法人神奈川県立保健福祉大学
 一般社団法人かながわ福祉大学校
 株式会社テレビ神奈川
 株式会社神奈川新聞社
 横浜エフエム放送株式会社
 神奈川県

かながわ感動介護大賞 表彰選考会委員 (〇…座長)

公益社団法人神奈川県社会福祉士会 副会長……………山崎 智美
 公益社団法人神奈川県介護福祉士会 会長……………コッシュ石井美千代
 一般社団法人神奈川県介護支援専門員協会 理事長……………小藪 基司
 神奈川県介護福祉士養成校連絡協議会……………石島 美紀
 公立大学法人神奈川県立保健福祉大学 准教授……………〇大島 憲子
 学校法人東海大学東海大学教育開発研究センター 准教授… 御領 奈美
 学校法人調布学園調布学園大学 准教授……………増田 いづみ

作品目次

最優秀賞	「新しい家族」……………	1
優 秀 賞	「大切な妻を支えてくれたみんなへ感謝をこめて」……………	3
	「古参の母 幸せな卒業」……………	5
	「I'm so happy」100歳の人生を 静かに締めくくった笑顔」……………	7
	「心は覚えている～認知症のお客様がくれた、 たったひとつの言葉～」……………	9
	「助六すし」……………	11
佳 作	「届かなかった年賀状」……………	13
	「前向きな気持ちで元気は取り戻せる!」……………	14
	「看取りケアで叶えた奇跡 歌合戦での最期のステージ」……………	15
	「もう一度夫婦で一緒にお散歩へ」……………	16
	「いつものように」……………	17
	「いつも「今が一番大事」と。」……………	18
	「サロンデイさん有難う」……………	19
	「歩ける喜び」……………	20
	「サロンデイ 80過ぎたが今が旬」……………	21
	「みんなでしたエンゼルケア」……………	22
	第13回かながわ感動介護大賞 応募作品の総評……………	23
付録	第12回最優秀賞作品 漫画……………	24

※作品は、応募者の意向を尊重し、ほぼ表現を変更せず掲載しました。

※介護を受けたご本人・ご家族以外からの作品は、ご本人・ご家族からの承諾を得て掲載しています。



「新しい家族」 須賀 眞理様

「眞理ちゃんがこれを食べて、と言っていましたよ。」「じゃあ、食べる！」
そう。私の名前は、認知症を患った母には特効薬の時代がありました。
そして、コロナ禍。会えない日が長く続き、母の認知症も進んでしまっ
たようです。いつからか会っても、もう私が誰かもわからなくなりました。
会話のキャッチボールも難しくなり、見かねて職員のKさんが会話に
度々入ってくださることもありました。Kさんが頬をくっつけんばかりに
近寄って、手を触れて目を見ながら話すと、母は氷が解けるように柔ら
かい表情になるのです。母にとって孫に近い年のKさんこそ、娘より自分
に近い安心できる新しい家族なのだと感じました。幼子になった母は
安心して甘えているのです。ちょっぴり嫉妬してしまうくらいです。
でも、それが離れて暮らす私にも、どんなに安心をもたらすことか……。
お会いできれば母の近況を伺え、相談できるKさんは母にも私にも今
では新しい家族なのです。

今、母は彼女のことを「大好きさん」と呼んでいるそうです。そして、
認知症があっても彼女と顔を合わせると表情が明るくなり、「会いたい
人に会えてうれしい！」「今度バスに乗って新宿に映画を観に行こうよ。」
など、しっかりとその時の気持ちを伝えられているそうです。

私もいつか施設にお世話になる日が来たら、100歳を迎えた母が、
母らしく居ることができる、彼女のいる施設に…と、娘たちに兼ねがね
希望している昨今です。

< 講評 >

歳を重ねるほど「大切な人を失う」経験が増える中、100歳を迎えた
お母さまに「新しい家族ができた」ということは、なんと素敵な体験で
しょう。認知症が進むと、目や耳に不自由がなくても、言葉の意味や
目の前の人是谁かといった「わからなさ」が日常に溢れます。利用者
を的確に理解し、「わかった！」という安心感をもたらすことは、認知症の
人の介護で重要です。それを丁寧に実践なさるKさんだからこそ、「大
好きさん」であり「会いたい人」なのでしょう。そして、近づき、見つめ、
そっと触れるというその専門性を的確に表現された須賀さんにも感服
します。たとえ目の前の人是谁かわからなくなっても、子どもの存在は
決して消えません。お母さまの中の眞理ちゃんは、お母さまが覚えて
いる姿で今も変わらず生き続けているのです。



優秀賞

「大切な妻を支えてくれたみんなへ
感謝をこめて」
山本 洋三様

感動介護を行った事業所
社会福祉法人日本医療伝道会
特別養護老人ホーム 衣笠ホーム

働き者で誰からも頼りにされた妻が認知症になり、デイサービスやショートステイを利用しながら8年間自宅で介護をした。妻の症状が進行する中、毎日の暮らしが幸せである事を二人で感謝しあった日々。

しかし、妻の体調が一変、入院し更に症状が進行、妻は衣笠ホームに入居した。

妻は私を待っていて、毎日二人で散歩を楽しんだ。職員さん達は妻と私に笑顔で微笑み「お二人で幸せですね」「どうぞごゆっくり」と声をかけてくれた。妻はその言葉にっこり、「ありがとう」と応えていた。

正直、妻の入居に葛藤があった。「妻と最期まで一緒にいたい」「大切な妻を家で見てあげたい」「でも、これからは専門家にお願いするしかない」様々な想いがあったが、みんなの優しさの中で妻が笑顔でいてくれることから入居を決断した事は間違いではなかったと確信した。

妻の体調が悪化し、最期の看取りをホームにお願いする事を決めた。「3カ月後に60回目の結婚記念日を迎えるんだよ」と職員さんに話した翌日、面会に行った私と二人の息子。なんと職員さん達が結婚記念日をお祝いしてくれたのだ。部屋を飾り付け、用意してくれた花束と共に家族の為に頑張ってくれた妻への感謝を伝えた。

次の日、妻は天国へと旅立った。愛いっぱいホームで、妻にふさわしい最期の瞬間を過ごし旅立つことができたことに感謝し、衣笠ホームのみんなに心からの「ありがとう」を伝えたい。

< 講評 >

働き者で誰からも頼りにされていた奥さまが認知症になり、デイサービスやショートステイを利用しながら8年間自宅で介護をされた山本さま。奥さまの症状が進行する中、毎日の暮らしが幸せであることを感謝しあいながら送られていました。いよいよ看取り期になり、60年の結婚記念日に職員さん達が部屋を飾り付け、花束でお祝いをしてくれたこと、長年家族の為に頑張ってくれた奥さまに感謝の気持ちを伝えることができたことが綴られています。看取りケアは「人生の最期まで自分らしく」を支えるための重要なケアであるといわれています。利用者の意思と家族の意向を尊重し、その人らしい人生の最期を迎えられるよう温かい看取りケアを今後も期待しています。



優秀賞

「古参の母 幸せな卒業」

小林 節子様

感動介護を行った事業所

社会福祉法人孝徳会

DayさーびすMISONOかまくらみち

広島から横浜に、認知症が進み一人暮らしが難しくなった母が私達の家に。89歳の時でした。

朝は1番、帰りは最後とデイのバスが大好きな母は『MISONOかまくらみち』に通う事になりました。母の一番の宝物は、みそのバックと連絡帳。デザートも付くという食事はいつも完食。月火木金土と生活の全てがデイ中心でした。

月日は流れ、杖で歩いていた母はやがて伝い歩き、手引き歩行となり、そして車椅子に。私を「節子」と呼ぶことも、娘の「ただいま」に「お帰り」も言えなくなりました。同居して8年が過ぎた頃、もう看取りの時期に入ったと言われました。施設が頭をよぎり「だけど、あと少しなら自宅でみたい」とケアマネに伝えました。「小林さんが決めたのなら、三宅さんの事、皆で最後まで見るからね」と優しいお言葉。その言葉通り出来なくなった母に「三宅さ～ん」と10年間何も変わらず声をかけ、大切に下さり、自宅で一語も話さない母がデイでは声を出すと聞いて家族一同驚く事も。

『あと少し』は2年を超え、その2年だけで298日、亡くなる3日前まで、実に1,300回以上、みそのに行けたのでした。その朝は、とうとう起き上がれずにお休みの電話。すると朝と夕「顔だけ見に来たよ」と皆さんが自宅に。心残りが無くなったのでしょうか。その夜に…。

夜中、みそのの訪問看護さん達と、ドレスを着せ化粧をしてオシャレな母となりました。

リビングに写真と花を飾り、孫やひ孫に囲まれ送りました。享年百歳。「みその」で一番の古参でしたがお母さん卒業ですね。横浜での幸せに包まれた10年が終わりました。

< 講評 >

「一番の宝物はみそのバックと連絡帳」というくらい、ご本人にとってデイサービスは生活の一部となっていたのでしょうか。自宅できないことがデイサービスではできていたとは驚きです。1300回を超える利用のなかで、様々な利用者さんと出会い、職員と接することが心身の状態を維持する一助となっていたのかもしれませんが。最後まで、ご本人に「また行きたい」という気持ちを持ち続けていただける、居心地のよさそうなデイサービスの雰囲気伝わってきました。ご本人そしてご家族を支えてきた関係機関の職員のみなさんが一つとなって過ごしてこられた10年という月日だったからこそ、「卒業」という言葉がご本人に送られているのだと感じました。



優秀賞

『I'm so happy』100歳の人生を
静かに締めくくった笑顔」
社会福祉法人平成記念会
介護老人福祉施設ヴィラ神奈川
小林 拓也様

今年、100歳を迎えられた利用者様が静かに旅立たれました。

その顔は穏やかで、まるで満ち足りた人生を象徴するかのようでした。私たちの施設では昨年より「看取りケア」を開始し、手探りながらも利用者様一人ひとりの「最後の時間」を大切にしようと努めてきました。高尾山への登山やご家族との食事会など、様々な希望に寄り添ってきました。この方は、環椎骨折で寝たきりにもかかわらず、笑顔を絶やさず、私たちにも気遣いをしてくださる優しい方でした。ご家族は加療や転院など悩み抜いた末、看取りを決意されました。

最期の願いは「一度、自宅に帰りたい」。その思いをどうにか叶えたくて、急ではありましたが、一時帰宅を実施。「今日、おうちに帰れますよ」と伝えた時の「I'm so happy」という笑顔は、今も忘れられません。帰宅後は穏やかに過ごされ、施設へ戻られた後、静かに息を引き取られました。

後日、ご家族よりこんなお手紙をいただきました。「母から度々『ここに死ぬまでいるのか』と尋ねられ、家に帰りたいのかと身構えていましたが、その真意は『ここで最後まで過ごしてもよいのか』というものでした。「母にとって、ここはとても居心地のよい場所だったようです。」このお手紙を見た時、私たちは胸がいっぱいになりました。

もっと早くから関わりたかった、もっとできたことがあったのでは、そんな思いもあります。今後も「I'm so happy」を引き出せるような最後の時間に寄り添っていきたいと思います。

< 講評 >

ヴィラ神奈川では昨年より看取りケアを始め、職員も手探りの取り組みということでした。「看取りケア」という言葉に大きな責任を感じ、不安を持った職員もいたのではないのでしょうか。でも、看取りケア自体は特別なものではなく日常のケアのなかから生まれるのだと思います。毎日の職員と利用者とのかかわりから施設が最後までいたい安心できる場所になっていったからこそ、笑顔の「I'm so happy」が引き出されたのでしょう。それは家族も同じで、看取りを決めた家族の気持ちを支えたことが、自宅での穏やかなひと時を持つことにつながったのだと思います。戻ることのできる場所、自分のいたい場所、そんな施設であり続けることができるよう、これからも利用者・家族に寄り添ったケアを続けてください。



優秀賞

「心は覚えている～認知症のお客様がくれた、
たったひとつの言葉～」

株式会社スマイル スマイル鷹取
常世田 崇様

私が良くデイサービスの送迎に行くAさん(80代女性)は、認知症の症状があり乗車中はいつも「お兄さん何時に起きてるの?」「どこから来てるの?」と、決まって同じ質問を何度も繰り返されました。私はそのたびに笑顔で「5時に起きています」「逗子 から来ています」と、答えていました。

ある夕方の送迎の時、いつものように「お兄さん何時に起きてるの?」「5時ですね」次は「どこから来てるの?」だよね・・・と頭の中で「逗子です」を準備していると、Aさんはこう続けたのです。

「逗子から来てるんだよね?」と。驚きと喜びで鳥肌が立ちました。繰り返すばかりと思われた言葉のやり取りの中に、確かに積み重ねられた【記憶】が宿っていたことを、その一言が教えてくれたのです。認知症は記憶を曖昧にし、日常を見えづらくすると思われています。

でも、その奥には感情や安心感、信頼のような【心の記憶】が残っているのだとAさんの言葉が教えてくれました。決まった時間のいつもの笑顔、優しい対応、それらがAさんにとって安心できる環境となり、一瞬でも記憶が繋がる奇跡を生んだのだと感じました。

現在、Aさんは体調を崩し、デイサービスは利用できなくなりましたが、あの時の「逗子から来てるんだよね?」という一言は私の胸に深く刻まれています。

介護の現場にはささやかだけれど確かに心を揺さぶる感動がある。私はこれからもそんな瞬間を大切にしていきたいと思っています。

< 講評 >

「子供叱るな来た道だもの、年寄り笑うな行く道だもの」。先人の素晴らしい言葉とはうらはらに、愛くるしい子どもやいたわるべき高齢者を急かたてた経験者は多いと思われます。働き盛りで重い責任を背負っている世代は、子どもやお年寄りへの歩み寄りが難しい瞬間が朝に夕に訪れ、腹立ちや後悔と共に仕事に向かう辛さも味わってしまいます。

常世田さんもまた責任世代の忙しさご自身の生活を切り盛りしながら、介護専門職として、毎日一人ひとりのお年寄りに寄り添い、衰える不安を優しく包み込んでくれています。その様子があたたかいお人柄とともに伝わる作品でした。

誰もがやがて老いますが老いてみるまでその本当の意味はわからない。お年寄りの孤独感に忙しい家族に代わって丁寧に注意深く対応してくれる介護職は、日本社会の貴重な財産です。



「助六すし」

社会福祉法人なでしこ会
横浜市常盤台地域ケアプラザ
堀 ユミ様

軽快な音楽と共に1台の軽自動車が坂の上の自治会館にやってきました。私たちの事業である移動販売初日です。

買い物を待っていた方達が交わす挨拶や話声が聞こえ、ひとつのコミュニティーになろうとしています。口々に便利さを話しながら野菜・総菜・米などが売れていきます。終了時間になり片づけ始めたころ、一組の親子が「まだ、大丈夫ですか?」と声を掛けてきました。重ねた箱を並べ直しているとお母さんが興味深げに体を乗り出しました。その目線の先には助六すしが数種類ありました。娘さんが「買っていこうか」と言うのと暫く悩み、たまごの入った助六すしを手に取りニコニコしていました。

お母さんは今日の買い物を何日も前から楽しみにし、デイサービスをお休みして来ました。いつもは娘さんが手伝わないと着替えも終わらず外出準備も大変だが、娘さんが仕事から帰るとお気に入りの服を着て待っていました。髪も小さなお団子にしてシュシュもつけていた姿を見て、終わっているかもしれないが来た事を優しい笑顔でお母さんを見つめながら話していました。

便利さだけを考えていましたが、小さな移動販売がたくさん笑顔を生むことに気付かされました。

西陽に向かって買い物袋を手に帰る親子の後姿を温かい思いで見つめていました。そしてきっと今夜は、買い物の事を話しながら助六すしを優しい笑顔で食べている姿を想像し、私たちも熱い思いになりました。

< 講評 >

地域では小売店の減少やバス路線の減少などで買物に不自由する高齢者が増えています。この課題に対して、各地域包括支援センターは、地域住民とともに様々な解決策を考えています。そのひとつが、受賞作品の舞台である「移動販売(スーパー)」です。本作「助六すし」では、移動販売の終了間際に現れたひと組の親子の様子に焦点を当てています。デイサービスをお休みしてまでも参加を楽しみにしていた「お母さん」と仕事帰りの「娘さん」の買物の様子が、筆者の温かいまなざしを通して生き生きと伝わってきます。「生活支援」という取り組みが、人々の便利さを越えて、地域のコミュニティーの再生、家族の時間にささやかな幸せをもたらすことができる。本作は、その大切な意義を私たちに教えてくれました。



佳作

「届かなかった年賀状」
金子 仁士様

「もう起きたの？」デイケアの朝。1人暮らしだった母は、3年前に転倒・骨折・手術・入院。退院してから週2日お世話になっている。特別な趣味を持たない母。用意周到に準備された様々な行事への参加、そして、冗談を交えながらの会話は楽しみであり、生き甲斐でもある。

ある日の連絡帳に「心で覚えていてくれて嬉しいです。」とあった。このような表現の心遣いにも感心した。

ケアマネさんの言動も素晴らしい。母が毎日、綴った日記を、毎回全て音読してくれる。息子の私と3人でいつも談笑する。母にとって嬉しい一時だ。

そんな母が12月上旬に脳梗塞で倒れた。手術・入院。母の希望で、すぐに帰宅した。その時のケアマネさんのスピードには驚いた。医師・看護師・福祉用具店等に連絡。即座に準備が整った。とても有難かった。担当の皆様も親身に対応してくれて、母はいつも「ありがとう」を繰り返した。「よいしょ、よいしょ・・・」が口癖の母は、精一杯頑張った。しかし、静かに眠るように旅立った。

あと5日で年明け、あと12日で96才の誕生日だった。

施設から年賀状が届いた。「今年もお話できるのを楽しみにしています。」とある。母宛てに来たけれど、母には届かなかった。手書きの心温まる言葉だった。

この3年間、担当してくださった役割の皆様の果たしてくれた仕事のすごさに感動しました。母も大満足していると思います。本当に有難うございました。

佳作

「前向きな気持ちで元気は取り戻せる！」
千葉 和美様

半年間寝たきりだったS様が、病院からストレッチャーで入所されたのが初対面でした。翌日リクライニング車椅子に乗車した本人から「トイレに行きたい」と一言。私は「昨日まで寝たきりだったのに無理だよ」と心の中で思いつつ「まずは立つ練習ですね」と伝えました。以降も繰り返し訴えられた為、座位が保てるようになってから立位補助の介護機器を使用したところ大成功！本人も久しぶりのトイレでの排泄を喜ばれました。以降、みるみるうちに本人の意欲と並行してADLも向上。介護機器で立位を保っていたはずが、気付くと自力で立位が保持できるように。職員の無茶ぶりにS様は「できないわよ～。よいしょっ」といつも器用にこなされます。車椅子の自走や立位も安定してきた為、本人の可能性を信じて機能訓練指導員に相談。1日の中で少しでも歩けたら…とあって準備した歩行器を上手に使いこなされ、数日で本人の移動手段となりました。

「S様すごいです。スイスイ歩いていますね」と伝えると「そう？うふふ」と嬉しそうに笑う姿が誇らしく見えました。S様の前向きな気持ちを見ていると「できない」と決めつけるのではなく、もっとフットワーク軽く一緒に挑戦する事がお互いにとってのやる気やモチベーションに繋がってくるのだなと考えさせられました。

特養で専門のリハビリ職員がいなくても、前向きな気持ちと介護機器の選定次第でADLは向上できると感じた大きな出来事でした。

佳作

「看取りケアで叶えた奇跡
歌合戦での最期のステージ」
小林 幸子様

今年度の看取り委員会の目標は『その人らしい最期』であり、最初の対象は7年前に入居した一番風呂が大好きな藤原さんでした。藤原さんは毎日15時になると、仲間と懐かしい歌謡曲を歌うのが日課でした。

しかし、藤原さんは末期がんのため、いつ歌えなくなってもおかしくない状況でした。徐々に体力が落ちていっても自ら車いすに座り、いつも通り歌っていましたが、ある日 容体が急変し入院しました。入院先でも「早く施設に帰り歌いたい」と言っておられ、家族の希望もあり、看取りとして退院となりました。

私たちは退院当日に最期のケアとして施設で『紅白歌合戦』を開催することにしました。退院4時間後に歌合戦を開幕し、ベッド上で寝たまま、赤い花柄の着物に金糸の結び帯の舞台衣装を身に纏い、酸素マスクをしながら、家族と入場されました。仲間からの「退院おめでとう！」の声を聞くとマイクを手にして歌い始めました。“奇跡の歌声”で4曲完唱し介護職員からの手紙にも、涙を流して頷かれ、歌合戦は感動の幕を閉じました。翌日藤原さんは大好きなお風呂にも入り、「ありがとう」と声をかけていました。そして3日後の15時に皆に見守られ天国に逝きました。

日々細やかに観察する目はその人らしさを彩り奇跡を起こす。私たちはこの経験を通じ命は尊く、笑顔はその命を輝かせ、その命は家族や傍にいる人に守られていることを学び、その価値ある命を未来に繋いでいきます。

佳作

「もう一度夫婦で一緒にお散歩へ」
株式会社リフシア リフシア善行
小泉 康様

Aさんは、退院後に自宅で生活することに不安を感じている家族からお問い合わせ頂いたことがご縁となりました。

自宅付近を夫婦で散歩中に転んでしまい、それが原因で骨折して入院となり、退院をする時には、車椅子を使って移動をすることになりました。見学に来た際にも、ご家族様から、夫婦でいろいろな所に旅行をしたり、毎日一緒に近所をお散歩するのが日課だったようで、それが出来なくなってしまったのが、とても心残りだと仰っていました。

退院当日にAさんにお会いした時には、無気力な様子が伺えました。その時に、所属するユニットの職員みんなで、ここを単なる生活の場だけにしてはいけない、家族やAさんの希望を叶えたいと強く思い、カンファレンスを何度も何度も重ねました。毎日の食事量や水分摂取がしっかりできるように工夫したり、足を動かす機能訓練を個別で毎日行ったり、席から洗面台やトイレに行く際など、Aさんも私たちも大変ではありましたが、少しづつ歩く練習を行いました。毎日ひたむきに行うことで、結果として、短い距離なら歩いて移動することが出来るようになり、車椅子から卒業をすることができました。

今では、毎日事業所近くの公園まで夫婦で散歩したり、家族と外出ができるようになりました。

Aさんや家族の想いに応えることができ、毎日散歩を楽しみにしているAさんを見て、介護という仕事をとても誇らしく感じる事ができました。

佳作

「いつものように」
社会福祉法人 小田原福祉会
潤生園 やすらぎの家 南鴨宮
鈴木 弘恵様

S様は、お仲間と会話が弾むと、必ず話す鉄板ネタをいくつか持っている。今日もいつものように友達との愉快だったエピソードネタを話して笑っている。

帰りの車中でも、いつものようにS様が「車の免許を取りたい」と言った時のご主人様との会話ネタを話して、私達を楽しい気持ちにしてくれる。そして別れ際、いつものように「今度ゆっくり遊びにおいで」と言ってくれた。私は「今度ね」といつものように返答をして、S様宅を後にした。ここまではいつも通り。しかし、S様は入所が決まり、私がS様と会えるのは今日が最後。明日からはこのやりとりは無い。そう思うと、いつも見ている帰りの景色がなんだか色褪せて見えた。

この仕事をして、いくつもの別れを経験した。S様のように既知の別れもあれば、突然の別れもあった。その度に思う。今日という1日を楽しく過ごし、来て良かったと思って帰宅してもらうために、今日できる精一杯のことを今日しなければ、次はないかもしれないのだと。

もしも、次に会う機会があった時、S様は私のことは覚えていないかも知れない。デイサービスで過ごした日々は、S様をはじめ多くのご利用者の記憶の奥の方にしまわれてしまうこともあるかと思う。それでも、一緒に笑いあったり、励まし合った楽しい思い出の一つ一つは彼らの人生の彩りとなり、きっといつかどこかで、ふと思い出してくれる日もあるような、そんな気がしている。

佳作

「いつも「今が一番大事」と。」
大石 勝己様

感動介護を行った職員
株式会社ふるさと デイサービスふるさと東戸塚
小西 努様、中山 麻衣様

昨年みずぶくれの冬。水仙の咲く頃に。妻(75才。要介護5)の体の一部に火傷の跡のような水泡が出来た。治ると又、別の所に新しく出来る。「私達の手には負えません」と在宅医。皮膚科の病理検査で「天疱瘡」。治しにくい難病と判明。「ふるさと」を休み、自宅で介護看病する事に。

桜の頃には治療効果が出始めた。通所介護再開の許可が。この頃から「ふるさと」の通所介護と看病が始動。「美香子さん、今が一番大事な時ネ」「出来る事はやります」と各担当が総がかりです。「病気を治すには体力作りからネ」「食事の前にやさしくトイレ介助。おなかスッキリにする。」「食事は一匙一匙やさしく全介助」完食です。食後に薬の服用。シャワー浴の前に皮膚の確認。入浴後、体を拭いて薬を塗る。その他の介護を終えて夕方帰宅です。日々この繰り返しが続く。

セミの鳴く暑い夏、汗を拭き水分補給をしながら続きます。病気が快復に向かっている或日の送迎時、私達のペアルックのTシャツに職員さんが気づき「とてもお似合いですよ」と笑顔で。張り詰めて介護看病してきた私の心に余裕も。

秋風が過ぎて、又、水仙が咲く頃にお風呂の許可が！約1年ぶり。二人掛りで湯舟に入れて頂き、シャンプーもしてもらい「サッパリ」です。この夜、妻はスヤスヤ。私もうれしい。朝には窓際に清楚な水仙の花が咲いていた。過ぎし日々が思い浮かびます。妻の病気を治療して下さったお医者様。そしていつも「今が一番大事」と言って、この様に関わって下さった「ふるさと」の皆様方。四季おりおり励まして下さいました事、誠に有難うございます。

佳作

「サロンデイさん有難う」

嶋田 隆子様

感動介護を行った事業所

株式会社サロンデイ サロンデイ鶴沼神明

「母さん助けて」娘の夫が3人の子供を残して他界。娘、孫、義父と同居をし、年月が流れた。お陰様で今は、孫3人とも社会人に。

義父は80歳を過ぎた頃、サロンデイを見学。運動の重要性を認識し、目標を持って通い始めました。継続的に運動する効果を感じ、リハビリに対しての質問が多くなり、皆さんとおしゃべりがもたらす効果を感じ、帰宅後もデイの話題が多くなりました。

長い間、お世話になっていると色々あり、在宅酸素を使用しなければならなくなった時、デイを辞めなくては駄目かなと思いました。でも、サロンデイは「大丈夫」と受け入れてくれました。重たいボンベを持ち歩き、管を外すこともできず大変でしたが、リハビリのお陰で、在宅酸素を外すまで回復。

お次は足が上がりず風呂に入れない。ケアマネさんに風呂に入れるサービスを紹介してもらいましたが、義父は「裸の姿を他の人に見られたくない」と。アハハ！困った。サロンデイに相談。リハビリをして時間はかかりましたが、先日、お風呂に入ることができました。「湯船に入れて気持ちいい また長生き要素が増えた」と義父、ウフフ。

今年、義父、95歳。すごいですね。今日も送迎の方の力を借りリハビリに行く義父を見送る。車中から皆さんが必ず手を振って挨拶してくれる。本当に雰囲気良く私の気持ちも和みます。

いつか、私もお世話になる日を楽しみにしております。

佳作

「歩ける喜び」

青木 富美子様

感動介護を行った職員

株式会社HSM セカンドアルバムさいかの家
宮川 せいら様

元気でスポーツマン、テニスをこよなく愛し、体を動かすことが大好きな主人が、突然、病魔におそわれた。「重症肺炎」入院中に心不全、コロナにも感染した。どうにか退院の目途が見ついたが「奥様が介護するのは無理」と施設行きを提案されたが主人も家に帰りたい、私も一人より二人の生活が楽しいと思い連れて帰りました。

先の分からない車イスの主人との生活が始まった。

ケアマネさんが退院後すぐデイサービスへ行かれるよう手配して下さいました。無口で人と接することが苦手な主人だが、少しでも私を楽しもうと思ったのか週3回デイサービスへ行ってくれました。その間、私も好きな事に時間を費やすことが出来ました。

介護は一人では無理。私も周りの人や子供達、何より助かったのはデイサービスのスタッフさんでした。

一年前には考えられなかった生活、歩くことも出来なかったのに今では杖をついて歩けるようになった。「お父さん施設に入所しないでよかったね」色々なことが走馬灯のように頭に浮かびますが、ここまで回復した主人をみてうれしく、これからも出来る限り自宅で自立できる生活が送れますよう共に歩いていきたいです。

デイサービスの職員、スタッフの皆様には感謝しかありません。「ありがとうございます」そしてこれからもよろしく願い致します。

今日も日課としている夕方の散歩。たわいのない話しをして歩けるこの幸せが、いつまでも続きますように。

佳作

「サロンデイ 80過ぎたが今が旬」

山口 雄二様

感動介護を行った事業所

株式会社サロンデイ サロンデイ小田原高田

朝一番、ほら聴こえて来るあの声、「おはよう」「今日もよろしく」「あのネェ～」で始まる「お年寄りのエンドレストーク」それをここのスタッフの方は、実に見事に聴いてくれる。とにかく聴きもらさず、聴きのがさず、相手の想いを知る。それは聴くことの大切さを周知しているからで、そこには本当に屈託のない笑顔が揃い、交わされる会話は日常のありふれたものだが、それをスタッフのはじける笑顔と応答が包み、ちょっとザワついてはいるが「これがサロンデイの日常の時間なのだ」「そう！」それは本当に居心地の良いもので、まさに“私の居場所”“大好きな時間”なのです。朝のルーティーンで始まり、全身体操、個人マシン運動、そしてボケ防止の為の“頭の体操”の出題と続きます。この頭の体操が一段と楽しい、漢字の読み書き、国語のクイズ等、特に数学計算図形数字クイズ等、最初の頃、問題が難しいとスタッフにクレーム。と即「それはヒッカケ問題よ。ヒッカケの要領が解れば簡単。そこがボケ防止の本領よ」とのこと。なる程納得！最初「80才老人ヒッカケて、なにが楽しいの！」等と軽口をたたいて揶揄していたが、今はボケ防止の本領域まで取得することが出来たのか、いたくこのヒッカケの数学問題が楽しくなっている。会社人間をリタイヤしてから20年。一般社会に順応するためにどれだけの労力を費やして来たことか、それが今ここにあります。それはオアシスみたいなもの。ここに来れば安心、身も心も回遊して自分の居場所に「どっぷり」とつかれる。ありがとう！

佳作

「みんなでしたエンゼルケア」

大木 葵様

感動介護を行った職員

株式会社メディプラス タツミ訪問看護ステーション鷺沼
矢部 亜沙美様

「おじいちゃんの身体、みんなできれいにしてあげましょう。」

在宅療養している間、父がお世話になっていたタツミ訪問看護ステーション鷺沼の矢部さんが私達にかけてくれた言葉です。

その日、母から連絡を受けて、明け方に子供達と急いで実家に駆け付けました。緊急のコールセンターに電話をすると、当直の担当が矢部さんでした。頑固で無口な父も心を開くくらい、いつも笑顔で元気な看護師さんです。

到着後、ベッドに眠っている父を見て「本当に眠っているみたいに穏やかな顔ですね。」と言ってくれました。苦しい癌闘病でしたが眠ったまま安らかな顔で旅立ってくれたのは私達家族にとっても救いでした。

父はモノ作りが得意で玩具を作ったり似顔絵を描いたり孫達をとっても可愛がっていて、子供達もそんな父が大好きでした。皆ショックで悲しんでいましたが、矢部さんが「おじいちゃんの身体をきれいにしてあげましょう。」と声をかけてくれて、私も子供達もエンゼルケアの手伝いをさせてもらいました。

前日まで皆の手を握り返してくれていた父。少しずつ冷たくなっていく手が悲しくて悲しくて涙が止まりませんでした。一緒にエンゼルケアをさせてもらったおかげで「今までありがとう」「じいじ、頑張ったね」とそれぞれ話しかけながらお別れが出来ました。

私達家族の心のケアまでしてくださり、矢部さんには本当にお世話になりました。ありがとうございました！

第13回 かながわ感動介護大賞 応募作品の総評

2025年は、団塊の世代(1947年~1949年生まれ)が全員75歳以上の後期高齢者となり、介護分野も「2025年問題」のひとつとして介護人材不足が、その深刻さに拍車をかけております。

そのような中、今年度の本大賞へのご応募は、ご本人(31作品)・ご家族等(16作品)の皆さまから47作品、介護現場等の職員の皆さまから19作品、計66作品ございました。心温まる作品に審査員も悩みながらの選考でございました。

ご本人の皆さまの年齢別では80歳代の応募が最も多く(17作品)、デイサービス等の利用が生きがいに繋がっているエピソードも多くございました。ご家族の皆さまからは、在宅介護を支えてくださる皆さまへの感謝と感動の涙のエピソードが多く、職員の皆さまからは、利用者様とのかかわりの中で生まれた「利用者様への想い」等々、本当に心温まる作品ばかりでございました。

2012年から始まりました本大賞は、2025年度(2020年度のコロナ禍の中止を除く)第13回をもちまして、その役割を終えることになりました。毎年多くの皆さまにご応募頂き14年間で925作品の応募がございました。その中には中学生41作品(2017年)もございます。目まぐるしく変わる国内外の情勢に多くの方々が大変な思いをされながらも涙あり、笑いありの感動エピソードの作品のご応募に、選考会委員一同、丁寧に選考させていただきました。本大賞に心をお寄せくださり、また、趣旨をご理解くださり協賛いただきました関係者の皆さま、広報等でご尽力いただきました皆さまに、改めて心より感謝申し上げます。

14年間、誠にありがとうございました。

かながわ感動介護大賞選考会座長 大島憲子

付 録

かながわ感動介護大賞の
最優秀賞作品を漫画化したので、
ご紹介します!

令和6年度
第12回かながわ感動介護大賞



海老原 美和様

にしび
「西陽のあたる玄関」

(漫画:ちべた店長)

漫画は、Instagramでもご覧いただけます。

福祉関連情報や「かながわオレンジ大使」(認知症本人大使)の活躍についても発信しているので、ぜひフォローしてください!

かながわ感動介護大賞
公式Instagram

フォローはこちら ▶▶▶



にしび 西陽のあたる玄関

第12回かながわ感動介護大賞 最優秀賞

海老原 美和様

画・ちべた店長



— 一時間も前から

お父さん、
まだ早いよ

玄関のいつもの椅子に座って
デイサービスのお迎えを待っている父に

そう何度、口にしたでしょう



サロンデイリフレ大庭

父が楽しみに
通っていたのは



寡黙な父はデイサービスを
嫌がるのでは、と心配しましたが

いいえ

いつも楽しそうに
仕切って
いらっしやいます



まるで別人のように

たくさんのお仲間と
談笑し、歌い楽しんで
過ごしていると

所長さんや
ケアマネさん
にお聞きしました



私は思うのです

お父様、94歳
ご立派ですね

そう言って
いただくけれど



父の幸せな時間を
作ってくださいました
デザイナービスの職員の
みなさまが立派なのだ

長年にわたり、
父の尊厳を大切に
関わりで接して
くださったからこそ

4



そんな父の

歳をとると

みんなお父さんのことを
嫌いになるんだね...

忘れられないひと



お父さん！

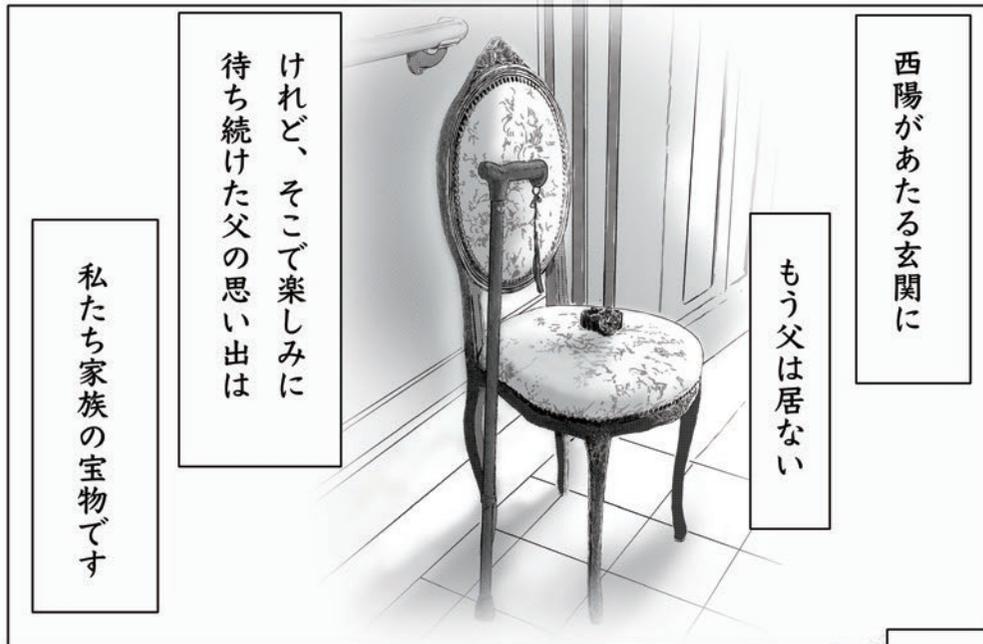
早くして！



つい、言ってしまった

自分に気づいた瞬間でした

3



西陽があたる玄関に

もう父は居ない

けれど、そこで楽しみに
待ち続けた父の思い出は

私たち家族の宝物です



サロンデイリフレ大庭のみなさま

本当にありがとうございました



パチンコ・パチスロの
神遊協
KANA-YUKYO
神福協
KANA-FUKUKYO

神奈川県遊技場協同組合
・神奈川福祉事業協会



公益社団法人
横浜市福祉事業経営者会



公益社団法人
横浜市福祉事業経営者会

株式会社サロンデイ



株式会社えひめ飲料 東京工場



株式会社 **えひめ飲料**

川崎市老人福祉施設事業協会
一般社団法人 神奈川県老人保健施設協会
社会福祉法人 横浜長寿会
一般社団法人 神奈川県高齢者福祉施設協議会
社会福祉法人 神奈川県匡済会

社会福祉法人 富士美
社会福祉法人 恩賜財団済生会支部神奈川県済生会
公益社団法人 神奈川県介護福祉士会

公益財団法人 神奈川県老人クラブ連合会
社会福祉法人 竹生会
公益社団法人 神奈川県社会福祉士会